

春季講演会

大規模気象現象の予測

1. 日時 昭和49年2月15日(金) 10~17

2. 場所 気象庁

3. 内容

1) わが国の天気予報技術の現状と問題点
竹永一雄：気象庁(予報課)

2) 天気予報の Predictability について
廣田 勇：気象研究所
吉田泰治：気象庁(電子計算室)

3) 気象情報の高度利用について
国沢清典：東京工業大学(情報科学科)

4) 電子計算機と天気予報
新田 尚：気象庁(電子計算室)

5) 将来の天気予報について一総合討論

現在までの考えでは、1)において天気予報の現場から、数値予報プロダクトの比重が増大したことに関連し

て、人間と機械との関係に重点をおいて、予報技術の現状と問題点を探り、2)では予測可能性の限界、それに対応してとるべき方策や基本的考え方をのべ(廣田)、現在気象庁電子計算室で走らせている北半球プリミティブモデルを用いて、各種物理量をコントロールしたり、計算スキーム、格子間隔を変更したりして、大規模気象現象の変化のシミュレートした結果を報告する(吉田)。また実際の子報では、観測網の不備、科学的知識の欠除、電子計算機からくる制約などのため、不完全なデータの使用を余儀なくされているので、3)では情報科学の立場からこれに対する問題点や対応策を提案して頂き、4)では気象力学だけでなく広く電子計算機と天気予報の間に介在する問題点、たとえば1)とは違った観点からの人と機械の問題その他について解明し、将来の子報(総合討論)にひきつづことにしている。

講演企画委員会だより

1. 討論会“地方の調査研究について”

今回をもって、一応この種の話しあいは区切りをつけることになったが、これからの学会の任務では、調査研究の具体的内容を深めるための努力、たとえば2月12日に計画されているようなシンポジウムを開いたり、地方支部を強化し、支部活動を通して大学と気象庁との協力関係を進めていくことが大切になってこよう。

今回の討論会では、調査研究の自由度についてはあまり議論されなかったが、将来の具体的進め方のなかから取り上げられることになる。

気象庁が調査研究に使用しているお金はおよそ2,000万円ぐらいと推定される。この中には、気象庁独自の金、気象研究所の地方共同研究、大学、気象協会などからの金に管区独自のものを加えている。その額の多寡は、調査研究の内容によるものであるが、管区研究会の出席旅費が大蔵省予算として認められていない。気象庁も努力はしているが気象庁の性格づけと関連してむずかしいようである。

また、これまでの何回かの会合で話されてきた研究員

の交流、共同利用施設の設定、あるいは研究費の大学への配算の提案など気象研究所が関係した部分の具体的・組織的進展がこの問題に大きな影響のあることが感じられた(討論会の記録は次号：東北支部)。

2. 大規模気象現象の予測

今回は、スケールの大きい気象現象に限定してその予測の問題をとりあげてシンポジウムを開くことにした。気象衛星やレーダーなど観測の話題提供者はスケールの大きいことからお願いしないことにしたが、討論の中から除外したわけではない。また、2月15日にきめたのは2月12日(別記)、2月13日、14日(気象庁の予報技術検討会)、1月20日~2月9日(気象庁の数値予報研修)とも関連づけ、なるべく多数の方の参加を希望したためである。

このシンポジウムについて話題提供者の打ち合せを1、2回もちたいと思っている。そこで出された問題を関係方面に配布するつもりであるが、とくに希望の方は講演企画委員会までお申し出を願いたい。(窪田正八)